

随想 お金とは!?

人間が、恐らく永遠に抱き続ける疑問

（株）PPQC研究所 加藤 宏光

年末にNHK・BSで放映された《BS1ス・ペシャル》「欲望の資本主義 特別編 欲望の貨幣論2019」を見た（二〇一九年七月十四日（日）午後一〇時〇〇分（一一〇分）の再放送）。

筆者が、ある意味最も不思議に思うテーマが《貨幣＝金》である。

武家の家柄を意識しながら育てられた筆者は、物心がついたころには《金は不浄のモノ》という概念を持っていた。今にして思うと、とんでもない躰・教育である。しかし、物心がついたころに植え付けられた意識は、結構心に残る。そうした基礎の上で臨床獣医

師としての道を拓こうと考えたのであるから、相当の矛盾・無茶であった。

それはさておき、《金》を必要なモノとして心に据え直した上で『はて、金とは何だろう!?』と改めて考えた。

具体的な金は《モノを買える金》で難しくはない。しかし《物を造ることが生きる原点である》という当たり前とも思える概念と、それらを《購える（あがなえる）》金を観念として対比すると、何かしら心がザワツクような不可思議な気持ちが出てこない。そんな気持ちを抱きながら、これまで経済社会を生きてきた。このような感性がいまだに残

る著者にとつて、NHKによるこの番組は非常に興味あるモノであった。

古典的な貨幣論として取り上げられていた《アリストテレス》の貨幣論は、次のようにまとめられる。

●アリストテレスの考え

生きる欲望に果てはない。ゆえに、彼らは際限のない財を欲することになる。この結果、もともと交換の手段であった貨幣が（それを貯めること自体が）目的化する。

アリストテレスは二、三〇〇年も前の時代の哲学者である。彼がどう考えたかはともかく、その時代にすでに《金を貯める

とする。

筆者は二〇年ほど前にアダム・スミスによる《富国論》を読んだ、というより書物を買った。しかし、内容が茫洋としてよく理解できないままに放置した。改めて考えると、彼の活躍した一八〇〇年代といえ、日本では徳川家斉の時代（文化・文政のころ）で、田沼政治から《水清くして魚住まず》といわれた松平定信のころである。洋の東西を問わず、農本主義から商業主義へと変遷していった時期として捉えなおすと、アダム・スミスの富国論（の一部）も理解できるように思う。

そのアダム・スミスによる《市場万能論》が当時脚光を浴びた。しかし、ノーベル経済学賞を受賞した経済学者・ジョセフ・スティグリッツは、『アダム・スミスは間違っていたことがわかった』とする。自己利益の追求が『見えざる手』に導かれ、社会全体の幸福を

もたらすという理論が主張された時点は資本主義が本格的に走り出す前の話だ、というのである。

●『テクノロジーは数字の夢を見るか?』と題したマルクス・ガブリエル（新實在論を説く哲学者）の《資本主義の本質》についての論述…

新たな技術は利潤への欲望が生み出す。資本主義は「成功」という概念の上に成り立っているシステムであり、「成功」者であり続けるためには同じことを続けていたらダメ。絶えず「成功」し続け、自らを維持する必要が生まれる。今日の資本主義の世界は、いわば「商品の生産」そのものになった。「商品の生産」自体が見せるための「ショウ」なのだ、という。

この辺りは、概念が抽象的過ぎて、何を主張しているのかわえにくい。しかし、キャッシュレス化が進む現代、金

（貨幣）がよく見えない気がしてならない。

●ユヴァル・ノア・ハラリ（人類の行方を思索する歴史家）の未来の社会では、通貨が消えてしまふ、という警告…

未来の社会では、通貨が消えてしまふかもしれない。データが交換手段となることを前提とした、新しい経済制度を設計しなければならぬ。歴史には人間の欲望の絶え間なく続く膨張しか見られない。欲望を満たすとすぐに新しい欲望が生まれる。そのおかげで私たちは石器時代と比べ何千倍もの大きな力を得たのだが、より満足し、より幸福を感じているわけではない。

●最後に岩井克人（経済学者）が語る、貨幣の、もう一つの意義…

貨幣は、本来人間を匿名にする。これが貨幣の最も重要なところである。そこでは人

間は自由なのだ。他の人に評価されない、自分自身の領域を持つていくということが人間の自由なのである。自分で自分の目的を決定できる存在…、これが人間の尊厳の根源になる。

この記述は、《やめられない、止まらない。欲望が欲望を生む、欲望の資本主義》／二〇一六年5月番組から《欲望の経済史／民主主義／時代の哲学／哲学史》へと発展してきた特別番組から受けた印象を元にしている。

こうした貨幣に関する考え方は、筆者がもともと持っていた《金とは何か?》という疑問に答えているわけではない。筆者と同じ疑問を抱き、それを突き詰めた先人が二〇〇年も前にいたこと、その時代に日本でも農本社会から実質商業主義へと時代が変遷したことを考え合わせて、さらに深い疑問が生じた。